



東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター
潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

研究課題(和文): フェイシズムの文化的諸相

研究課題(英文): Cultural Foundations of Face-ism

申請者名・所属先: 鈴木敦命・人文社会系研究科

海外招聘者名: Changhong Liu (Bournemouth University)

1. 研究の目的

本研究課題は、フィクションへの接触とフェイシズム (face-ism) の関係について実証的・量的分析を行い、フェイシズムの背後にある文化的要因を探ることを目的とした。フェイシズムが日本に限らず様々な文化で広く見られる社会現象であることを踏まえ、日本と英国で同様の調査を行い、フィクションの役割の汎文化性について検証を行った。

2. 研究開始当初の背景

人相という言葉に代表されるように、個人が持つ性格や能力などの様々な特性をその顔から判断できるという考え方は、古今東西を問わず人間社会に根強く存在する。人相を読み取る方法論の疑似科学体系である人相学(観相学)の起源は漢や古代ギリシアにまで遡り、現代においても、選挙、裁判、雇用などの重要な社会的決定を顔が左右していることを示す証拠は数多い。しかし、実際には、顔から人の特性を正確に推測することは容易ではない。そのため、顔が深刻な社会的影響力をもつ現状は「フェイシズム」と呼ばれ、その起源や解消策を明らかにすることの必要性が訴えられている。

フェイシズムの根幹には、特定の容貌と特定の特性とを結び付けるステレオタイプ的な連想がある。例えば、細い目をした人物は丸い目をした人物と比較して信頼できないと判断されやすい傾向にある。このような容貌と特性の定型的な結び付けは、小説、映画、テレビドラマなどのフィクションで、表現として多用されている。従って、フィクションや視覚芸術などへの接触がフェイシズムを強化する可能性が一つには考えられる。一方で、文学的フィクション (literary fiction) は定型的観点に疑問を投げかけて人間や物の見え方の複雑性を明に暗に訴えるものであり、フェイシズムをむしろ弱めるかもしれない。

そこで、本研究課題では、フィクションへの接触とフェイシズムの関係について探索的に調べる研究を行った。フェイシズムが日本に限らず様々な文化で広く見られる社会現象であることを踏まえ、日本と英国で同様の調査を行い、フィクションの役割の汎文化性について検証した。

3. 研究の方法

英国人と日本人を対象として、フィクションへの接触とフェイシズムの関係を調べるオンライン調査を行った。英国人 318 名、日本人 316 名からデータを収集した。フィクションへの接触の程度は、作家名再認識テスト (Author Recognition Test) で測定した。フェイシズムの程度は、顔からその人物の種々の特性を極端に判断する傾向として測定した。以上に加えて、目からの心の読み取り、顔表情認知能力、ステレオタイプ受容 (ステレオタイプは有用なものだという信念) の測定も行った。



4. 研究成果

調査データの分析の結果、日英いずれにおいても、フィクションへの接触とフェイスズムの間に明確な関連は観測されなかった。ただし、英国人では、フィクションへの接触が対人認知上の好ましい特性と関連していた(目からの心の読み取りと顔表情認知能力との正の相関、ステレオタイプ受容との負の相関が認められた)。一方、日本人では、そうした関連は認められなかった。フィクションへの接触と対人認知の関係の英日差の原因について、現在考察を進めている。

5. 主な発表論文等

[ブックレット]

鈴木敦命・宮崎由樹・大江朋子・上田祥行. (2021). Humanities Center Booklet Vol. 7 「顔の実験心理学 (2) — 顔では決まらない顔の印象」. 東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター.

[雑誌論文]

Suzuki, A., Tsukamoto, S., & Takahashi, Y. (2022). Generalized tendency to make extreme trait judgements from faces. *Royal Society Open Science*, 9(11), Article 220172. <https://doi.org/10.1098/rsos.220172>

[学会発表]

鈴木敦命. (2022年8月). 顔で人を判断する人の心理学. ルッキズム(「顔身体学」領域主催公開シンポジウム), 國學院大学.

鈴木敦命・小山内秀和・Chang Hong Liu. (2021年9月). 物語読書習慣と社会認知の個人差の関連に関する英日二国間研究(ポスター発表). 日本心理学会第85回大会, 明星大学(オンライン開催). 【学術大会優秀発表賞受賞】

Wong, J.-Y., Suzuki, A., & Liu, C. H. (2021, Jan). *Is face perception associated with fiction reading?* (poster session) January Meeting of the Experimental Psychology Society, Online.

[その他]

鈴木敦命. (2022年8月). 顔知覚の心理学/The psychology of face perception. 東京大学ヒューマニティーズセンター第75回オープンセミナー(企画), 東京大学.

鈴木敦命. (2020年7月). 顔の実験心理学(2): 顔では決まらない顔の印象. 東京大学ヒューマニティーズセンター第25回オープンセミナー(企画), 東京大学.

鈴木敦命. (2020年1月). 顔の実験心理学(1): 心の中の顔イメージを可視化する. 東京大学ヒューマニティーズセンター第22回オープンセミナー(企画・話題提供), 東京大学.

6. 招聘フェロー(海外招聘者)からのコメント

It has been a very productive journey to work with Professor Atsunobu Suzuki on this project. Our collaboration on several related research questions started in 2018, before being awarded with the grant in 2019 by the Humanities Center at the University of Tokyo. We discussed and planned two lines of research, one has been described in detail in Professor Suzuki's report, the other is a related project carried out at Bournemouth University. Here I will give a few details about the latter, which investigated the relationship between face perception and fiction reading. Although my research visit to Japan was delayed by two years due to the pandemic, this project was able to continue without much interruption during this period. With the help of an



outstanding undergraduate student, Jing-yin Wong, we were able to complete data collection just before the onset of the pandemic. Bournemouth University participants were tested on their ability to remember faces, to discriminate facial expressions, and their knowledge about famous fiction writers. The results showed that students with good knowledge of author names also tended to have better ability to recognise faces and facial expressions. We presented this finding to a conference of the Experimental Psychology Society (Wong et al., 2021). We have since replicated the finding. Currently, my undergraduate and Master students are helping us running a new experiment to determine whether the knowledge about fiction author names is only associated with face recognition but not object recognition. Apart from this project, a very memorable experience was the public lecture I delivered in Japan on the psychology of face perception. With the help of Professor Suzuki and staff at the Humanities Center, the lecture generated a lot of interests among audience, and was well attended.